σάρξ
サルクス

知っておきたいキリスト教のことば （154）

肉 にく

「ねえ、今日なに食べたい？」、「肉!!」。このような会話が毎日続く家庭もあるでしょう。わたしは個人的には魚が好きですが、子どもが小さなときにはそうも言っておられません。

ただ聖書に出てくる「肉」はそのような「食べ物」のことではなく、「からだ」や「人」を意味することが多い言葉です。創世記 2 章によれば、神さまは土の塵で人間をかたどり、鼻から命の息を入れて生きる者とされました。土の塵は肉となり、そして命の息は霊となったと理解することもできます。

パウロはガラテヤの信徒への手紙５章の中で、肉の業は低級であるのに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制だと書きます。肉は人間の本質であり、神さまから離れた罪深い状態だというのです。

さらにローマの信徒への手紙８章では、肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和だと書きます。その理由は、肉の思いに従う者は神に敵対しており、神の律法に従っていないからだということです。さらに肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありませんと締めます。

しかしイエス様は、「受肉」されました。神さまのご計画の中で、罪と死の象徴である「肉」を持たれたのです。イエス様はわたしたちを罪と死から引き上げるために、あえてわたしたちと同じ場所に立たれ、十字架の死によってすべての罪を贖われたのです。

パウロは、キリストがわたしたちの内に宿ることによって、わたしたちは肉ではなく霊の支配下にあると言います。肉ではなくイエス様に生かされ、歩むことが出来ればと思います。

次回は「ニケヤ信経」です。お楽しみに。

「歌を歌う天使達」
ウィリアム・アドルフ・ブグロー
（1825～1905 年）

なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従いえないのです。

（ローマの信徒への手紙８章７節）